
B L 小説（仮タイトル）

ぱあぷる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

BL小説（仮タイトル）

【Nコード】

N01640

【作者名】

ばあぷる

【あらすじ】

「BL小説（仮タイトル）」の登場人物紹介ページです。

登場人物紹介

〽〽登場人物紹介〽〽

はただけい
原田圭

本編の主人公。奏多に恋している。金持ち一家の一人息子で、将来は親の会社を継ぐ予定。
過去に、撫子と何らかの交流があったが……

くらもとかなた
倉本奏多

本編の主人公。当初は圭を手駒として見ていたが、現在は恋をしている。何かとモテる。

「会社編」では、圭の会社に勤め、その後麗子と付き合っが……

たきがさきれいこ
滝ヶ崎麗子

奏多を狙う怪しい女性。都茂子、真理など、多くの人物を手下にし、巧みな技術で圭と奏多を追いつ込んでいく。
けいとかなた

たきがさきともこ
滝ヶ崎都茂子

麗子の姪。気づかないうちに麗子の手駒として扱われているが、本人は気づかない。

高校時代から恋をしている奏多を狙い、邪魔な圭を殺そうと目論むが……

うえひらまり
植平真理

圭の元カノ。トモコの後輩で、奏多を手に入れる作戦のために無理やり協力させられている。

なでしこ
撫子

ロンドンに留学している圭の幼馴染。圭に恋している。ヤンデレで、恋のライバルには容赦無い。

プロローグ（前書き）

クリックありがとうございます。

この物語には、15歳未満の方にはふさわしくない表現、BL要素が含まれています。

苦手な方、15歳未満の方は、すぐにブラウザの戻るボタンを押してください。

それでは、「BL小説（仮タイトル）」が始まります。

プロローグ

「あつ……んっ」

甲高いあえぎ声がオフィス中に響く。夕方の会社、そこで男女はひたすらに体を重ねる。

「麗子さ……っ……ココ、気持ちイイ？」

「あつ、奏多クンやめっ……あ……ああん……ハア」

二人の行為が終わりに差し掛かった頃、男は女の隣で独り言の様にこう呟いた。

「……圭」

その名前を聞いたとたん、女　麗子の顔は強張った。しかし、麗子は表情とは裏腹に、後悔の渦に飲み込まれていた。

そう、二年前のあの日　あの日に、あのような突き放し方をしなければ。

あの頃麗子は、人事課の課長として忙しい日々を送っていた。

彼女はその日も残業で、たった一人で会社に残っていたハズだった。あの瞬間、あの場所で見えたモノ……それは、麗子の中に眠る性癖を目覚めさせ、新しいオモチャを与えられた子供の様に、目を爛々と輝かせた。その目は人を魅了する物であり、それと同時に恐怖を与える物でもあった。

現在、奏多は麗子に甘い言葉を囁いてくれる。テクニクだって豊富にある。会社にだってバレていない。それに、麗子は奏多を愛してる。部下としても、友人としても、恋人としても。

欲しい物は何だって昔から揃っていた。しかし、ただ一つだけ手元に無いモノ……それって何？

相手の男の地位？お金？……いいや、そんなモノは必要無い。そんなモノより一番大切な何かを自分が手に入れていない事を麗子は理

解していた。そして、それが何なのかもとづくに分かっている。でも、考えるだけで己はどれだけ酷な事を……と、その先にどうしても進めなかった。

ビルの三階。清潔感漂う、白い空間。その場所は、彼にとってただ一つの幸せを感じ取れる場所だった。

くちもとかなた
倉本奏多。

まだ二十五歳という若さの青年は、当時、全てをとある女性に託していた。

窓の外を眺めながら、奏多はある事を思い出していた。

それは五年前のあの日のあの夜の出来事。あれは、奏多にとって思い出したくない過去の出来事。

一生忘れない、いや、忘れない、しかし忘れることのできない過去。それは、奏多だけでなく、麗子も同じ。麗子も、忘れないのに忘れられない、過去の出来事。

奏多は、フツと首を横に振って、何も考えないことにした。

思い出したくない。それなのに頭の中から離れない、あの人の顔が。

1 ㄱ 出会い (奏多 side)

「あの、倉本先パイ……ですよね？」

「そうだけど、何」

「ず、ずっと好きでした！ こ、これ……受け取ってください！！」
「ありがとう、これ、頂くね」

本当の愛って、なんなんだろう。

こうやって、俺が好きだという女は余るほどいる。けど、それは本当か？

俺に振られたら、こいつらはまた新しい恋を探すだろう。

どうせ恋愛なんて、たった一時の心の迷いに過ぎないのだろう。ただ、それだけの話だ。

人間なんて、俺にとってただの手駒。俺が有意義な時間を過ごす為の道具に過ぎない。

だが、最近尺に障る奴がいる。一年の原田圭^{はらだけい}。男の癖に男にモテて、認めたくは無いが俺より人気がある。

たかが手駒が俺の上に立つなんて許せない。潰してやる。

たったそれだけの理由で圭に近づいた。

……それだけの理由のハズだった。

俺は圭に先パイとして優しくしてやった。案の定、奴は俺の罠に引っかかった。

「奏多先パイー！」

朝っぱらから……うるせえなあ、オイ。

「ああ、おはよう」

貼り付けた爽やかな笑顔を圭に向ける。

まア、圭といると、他の奴らも俺の手駒にしやすくなる。

「奏多クンと圭クンが並んでると、本当美男！！　ツて感じでいいよねえ〜！　もお、ご飯三杯はいける！！」

「だよねえ〜！！」

いつもと変わらず、女子共一（この場合は、腐女子共と言ったほうがいいのだろうか）が騒いでいる。

「本当ですよ、先パイかつこいいですよ」

圭は、毎度毎度その話に乗っかる。

「なんでお前まで……　というか、圭は教室に早く戻れ。次、体育だろ。着替えないとヤバいんじゃないかねえ？」

「よく覚えてますね先パイ！　俺、感動しちゃいましたあ！　グスッ」

「やだあ〜圭クンかわいい〜」

おいおい、何涙目つくってんだ。お前らも、何甘やかしてるんだ。

「おい急げ！　先パイに迷惑かけていいとでも思ってるのかよ」

「はい、わかりました！　ではまたッ！」

「たたく……　圭は何考えてんだか……　あいつの考えが一つも読めない。奴は俺の手駒　いや、玩具。それだけでいいのに。いちいち俺より上なの見せつけて目障りだ！」

どうもこいつの考えていることは分からない。いや、というより分かりたくない、かな。

俺はため息をつき、小走りで教室へと向かった。

……あの時はまだ思ってもいなかった。まさか圭と俺が、あんな事になるなんて　……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0164o/>

BL小説（仮タイトル）

2010年10月11日00時46分発行